

「聖書に親しむ」

左近 豊（青山学院大学国際政治経済学部宗教主任・教授、
日本基督教団美竹教会牧師）

奉職している青山学院では、幼稚園から大学までの礼拝や授業で用いる聖書を、2020 年度から（それまで用いていた「新共同訳聖書」（1987 年）から）「聖書協会共同訳」（2018 年）とした。様々な翻訳を読み比べながら、聖書の言葉の奥行と豊かさを味わっている。それぞれの訳語の違いを通して、原語の持つ意味の広がりや深みにも気づかされる。

～聖書と翻訳文化～

柳父章氏の『翻訳とは何かー日本語と翻訳文化』（法政大学出版局、1976 年）によれば、翻訳は一つの文化である。例えば英語圏で英語で書かれたフィッツジェラルドの小説を日本語に長けた作家が、日本語文化圏で味わえるようにと翻訳する場合を想定する。文化が異なるので英語圏にはあっても日本語圏にはない概念や事象、ニュアンスをどう訳すかといった問題があろう。直訳ではもちろんなく、かなりの意識を行うということになる場合もある。これは、動的等価という翻訳理論が適用されている例と言える。原文と翻訳文とで品詞の種類や文と文の対応が変わることもありうる。

実は 1978 年に出された「新約聖書共同訳」がその例と言えよう。例えば「心の貧しい人たちは幸いである」と訳されている所を、ギリシャ文化圏での意味を日本語に置き換えて「ただ神により頼む人々は、さいわいだ」と訳した。これは全くの意識だが、原文の意味は汲んでいる。「義に飢えかわいている人たち」も「神の御心にかなう生活に飢えかわいている人々」と翻訳した。ただ、この翻訳はあまりに解釈が入りすぎて原文に忠実でないとのことで、「新共同訳聖書」では修正されて形式的等価が重視された。

～翻訳の醍醐味～

さて、翻訳の醍醐味といえるのは、柳父氏の名付けた「カセット（宝石箱）効果」と呼ばれるものだ。ある言葉が新しい文脈に置かれる時、その言葉自体が新しい文化との出会いの中で固有の効果によって色づけ

され、補われ、変質される。どちらの文脈からも自由な意味が文化の出会いである翻訳によって生じる。原語そのものの未だ十分に知られざる何かが翻訳語にはあると感じさせる効果のことで、まるで宝石箱のように何がそこに盛られているのか、わくわくさせる。不十分な理解を不十分なままで固定し価値を与える。しかもその意味の理解が不十分であることを問題にさせない、そのような効果を生み出すもののこと。

明治時代にヘボンが聖書を日本語に翻訳する際に、キリスト教の重要な概念である“Love”をどのように日本語に訳すかで苦労したという。「いつくしみ」とか「このむ」を考えた形跡もある。クリシタンの翻訳でも「ごたいせつ」と訳したようで、「愛」という語は避けていたという。それまでの日本語の「愛」には色欲や愛玩、愛欲、肉欲的な意味合いしかなかったそうだ。ところがあえて「愛」をキリスト教の“Love”の訳としたことで、次第にキリスト教的な意味を纏^{まと}うようになり、日本の文化に浸透し、ついには尊い概念としても用いられるようになったという（望月洋子『ヘボンの生涯と日本語』新潮選書、1987年）。これは本来、日本語では陰に隠れていた美しい言葉に聖書翻訳が光をあて、限りなく尊い高みにまでこれを引き上げるのに一役買った例である。

～聖書翻訳の味わい～

日本文化に聖書翻訳が与えた影響は他にもあるが、逆もまたあり得よう。原語で陰に隠れていた意味が翻訳によって光を当てられ発見されるという恵み。例えば東洋の文化にある「恥」の概念が聖書の語る“恥”を再発見するということも最近言われている。翻訳は一方向にではなく、双方向に言葉や文化に影響を与えながら、聖書の持つ豊かさ、深さを時代を追うごとに明らかにし続けてゆくであろう。各種の翻訳聖書を通して私たちに与えられている豊かなみ言葉の賜物を排他的にではなく、包括的に受け止めてゆければと願う。